

近世儒学関係諸文庫について

柴田, 篤

九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授 : 中国哲学史

<https://hdl.handle.net/2324/10625>

出版情報 : 貴重文物講習会. 9, 2008-06-20. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

中国哲学論集第三十三号抜刷
平成十九年十二月発行

碩水文庫余滴

— 楠本正継教授と九州大学附属図書館 —

柴田篤

碩水文庫余滴

— 楠本正継教授と九州大学附属図書館 —

柴田 篤

はじめに

楠本正継氏（一八九六〜一九六三）は、大正一五年（一九二六）一〇月より昭和三五年（一九六〇）三月まで、九州大学（旧九州帝国大学）文学部（旧法文学部）の教官として在職され、九州大学における中国哲学史研究の礎を築き、数多くの偉大な業績を残した。その一つに中国哲学、殊に宋明思想及び江戸崎門学関係書籍の蒐集しゅうじゅうも数えられる。本稿では、その最初の大きな事業とも言うべき昭和八年の「碩水文庫」設立に関する事柄、また戦争中の附属図書館長としての功績等について、従来余り知られていない内容を中心に述べることをとしたい。¹⁾

一 「碩水文庫」と「守待室」

「碩水文庫」は九州大学附属図書館中央図書館（福岡市東区箱崎）の地階「保存書庫」の中にある。幕末平戸藩の儒者であった楠本碩水（一八三二〜一九一六）の旧蔵書が収められている。昭和八年（一九三三）、法文学部支那哲学史講座（現在の九州大学大学院人文科学研究中国哲学史講座）の楠本正継教授の仲介によって、購入されたもの

である。経・史・子・集全般にわたる漢籍、殊に中国近世儒学関連の書物をはじめとして、江戸儒学関係の書籍、とりわけ山崎闇齋学派（崎門）の写本類などを特色とする特殊文庫である。「碩水文庫」に関しては、楠本教授の門人である岡田武彦氏（当時九州大学教養部教授）が「碩水文庫雑感」（『図書館情報』三二号、一九六八）の中で、碩水の生涯と学問を中心に述べている。²⁾

楠本碩水は、名を孚嘉と言ひ、肥前針尾（現在の佐世保市針尾中町）に生まれ、平戸藩校維新館に学び、江戸に遊学した後、平戸藩に仕える。維新後、故郷針尾に帰り、鳳鳴書院を設立して多くの逸材を育成した。月田蒙斎（名は強、一八〇七〜一八六六）との出会いを通して崎門の学統を継ぎ、以後山崎闇齋流の朱子学を信奉し、その学派の頭彰に務めた。兄の端山（名は後寛、一八二八〜一八八三）も平戸藩儒であり、幕末維新期の藩政改革に献身した人物である。³⁾ 端山の子である海山（名は正翼、一八七三〜一九二二）は楠本正継教授の父に当たる。「碩水文庫」は、そうした縁により九大に設置されることになったのである。

「碩水文庫」の書物が附属図書館蔵書として受入登録されたのは昭和八年八月一日（一部は九月九日）であるが、登録された翌年の九月に、『碩水文庫目録』（B5版）が附属図書館より刊行される。文庫図書のパ列の通り、書名の五十音順で編集され、本文は九十六頁、一〇六六部、三二四一冊が収載されている。中に和書を含むが、九大の漢籍を中心とした文庫目録としては最初の出版となる。巻頭に「碩水文庫に就て」（四頁）と「凡例」（一頁）を収める。筆者名は記されていないが、岡田武彦氏は、「記事は蒼生齋先生の手になるものである」と書いている（『碩水文庫雑感』）。蒼生齋とは楠本正継氏の別号である。現在ではこの目録自体が稀覯本に属すると言つてもよいので、「碩水文庫に就て」の全文を次に掲げることにする（句読点、仮名遣いはそのままだが、誤植は「」内に正し、当用漢字のあるものは改める。読解の便宜のために、読み仮名と「」内に句読点を補う）。

碩水文庫に就て

碩水楠本先生、名は孚嘉、字は吉甫、謙三郎と称し、又天逸と号す。

天保三年壬辰正月二十六日肥前国彼杵郡針尾島江下に生る。考は養齋、兄弟五人、長を端山となす、先生は則ち第三子なり。少にして佐々姓を冒し後本姓に復す。平戸藩主松浦氏に仕ふ。年少よく藩学生員に補せられ句読師、助教を歴て遂に教授となる。

明治戊辰藩議によりて貢士を受け五月京師に上る。幾もなく朝廷命じて会計官租税司判事と為す、固辞せしも允されず。己〔己〕にして漢学講官に転じ又大学小博士に叙せらる。庚午秋大学廢せらるゝと共に平戸に帰り針尾山中に入り茅を結びて居る。四方風を聞き来り学ぶ者日に多く、同志相謀りて舎を其の傍に設け、誦読の声溪山の間響く。端山官を罷めて家居するに及び更に鳳鳴書院を建て相与に学を其の中に講じ一時盛を極む。

先生研学の志厚く、曾て広瀬淡窓に従ひ、又草場珮川、木下韓村の門に入りしも皆得る所なくして去る。安政戊午江戸に遊び業を佐藤一斎に受け、居ること歳余にして帰る。初め先生肥後に遊び長洲を過ぎ月田蒙齋を見る、蒙齋其隨筆を出して之を示す、是に至り書を以て質正し得る所愈多し。その他金子霜山、春日潜庵、大橋訥庵、吉村秋陽、池田草庵、尼崎修齋、小笠原敬齋の諸儒と相交る。

先生常に自立を重じ苟〔苟〕も世と合せず、而して其忠孝を励し名分を謹み出处を審にし義利を弁ずるに至つては則ち犯すべからざるものあり。晩年に及び生徒を謝遣し、独り詩を頌し書を読み古人を尚友して自ら楽しむ。

其学博くして雑ならず、大学、中庸に於て最も見る所あり。先生嘗て曰く

大学は是れ性学の書〔一〕知を主とす〔二〕故に格致より入る、中庸は是れ心学の書〔一〕行を主とす〔二〕故に戒懼より入る〔一〕朱子の序文、大学に於て性を言ひ中庸に於て心を言ふは此た〔れ〕が為なり、二書既に治まれば則ち語孟六経治めずして明かなるべし

と。大正五年十二月廿三日歿す、年八十五。

先生の編著次の如し、皆前後刊行せられた〔れ〕たり。

一、碩水先生遺書十二卷

一、碩水先生余稿三卷附録二卷（以上著述）

一、朱王合編四卷附録一卷（編輯）

一、崎門学脈系譜一卷

一、日本道学淵源録十一卷（以上増補）

明治辛亥先生年八十、門人等相議し一字を構へて藏書の所となし名つけて守待室と云ふ、先生数十年來聚むる所〔^{かみ}上六經四子濂洛閩閩より下元明清及本邦理学諸儒の書に至るまで悉く其中に列す。然れども先生歿後は其藏書次第に散出せるものあり、例へば明嘉靖本三礼鄭注の如きものは既に睹^みくことを得ず。朝鮮刊本理学通録、明刊本道南源委録等は嚮^{むか}に本学支那学研究室に帰す。

本書目の所録は守待室収藏書の旧観を悉^{つく}す能^{あた}らずと云へども宋以来の程朱学、本邦崎門学関係の文献としてはなほ貴重なる資料たるを失はず。

昭和九年九月

この文章は、旧蔵者である楠本碩水の略伝と人柄、学問、編著等が記され、最後に旧文庫の由来について書かれている。明治辛亥は明治四四年（一九一）のことで、碩水の八十歳を祝つて、門人たちが先生のために醸金して建てた図書室が「守待室」であつた。つまり、「碩水文庫」は、崎門儒者碩水の学問とその門人たちの思いによつて成つた、この「守待室」を前身とする。書庫を贈られた碩水は、この時「守待室記」という文章（漢文）を著す。没後、門人らの手によつて編集された『碩水先生遺書』巻六に見える『楠本端山碩水全集』所収。「碩水文庫に就て」の末尾、「明治辛亥先生年八十」以下、「悉く其中に列す」までの文章は、「守待室記」の前半部分に基づいて、これを書き下し文に改めたものである。「守待室記」の全文を次に書き下す（当用漢字のあるものは改める）。

守待室記

明治辛亥の歳、余年八十、門人子姪、賀筵を開かんことを請う。余曰く、以て為す勿れ。老いて述ぶる無ければ、何ぞ賀有らん、と。再三来りて請う。乃ち一字を構えて蔵書の所と為し、以て壽牘じゆしやくに代えんことを相い議す。是こに於いて数十年聚むる所、上は六経四子濂洛閩もん自り、下は元明清及び本邦理学諸儒の書に至るまで、悉く其中に列度す。蓋し古人、名山石室に蔵するの意なり。道は書に因りて伝わり、学は人に因りて興いこる。安くんぞ知らん、百歳の後、之を読みて奮然として起たち、以て道学の伝に任ずる者有らざらんことを。因りて守先待後の語に取りて、名づけて守待室と曰う。然りと雖も書の聚散存佚は、自ら命数有り、区区の念を其の間に置くに足らざるなり。此れを書して記と為し、并せて以て諸子に謝す。天逸老人楠本孚嘉識す。

附記

室は宅の東南数十歩、稍や高き処に在り、山を負いて海に面す。海広きこと一里、岡巒こうらん環抱して、潮汐往来し、艇舸出漁して、魚蝦えいせう乏しからざれば、則ち松岳しょうがく巍立して、溪田連接し、樵農錯居して、薪穀余有り、真に遁世の楽土なり。余嘗て謂う、針峽の勝は、天下比たかい罕まれなるも、其の僻壤に在るを以て、甚だ世に顕われず、と。而れば此の室も又一郷の勝を占むれば、登覽の際、山を楽しみ水を楽しむの意無くんばあらざるなり。夫の名の頭晦の若きは、則ち彼の蒼に聴くのみ。吾、何ぞ与あからんや。天逸又識す。

在郷の門人有志は、碩水八十の壽祝慶賀として蔵書室を建てることを決め、その年二月二十七日付けで門弟諸子に醸金依頼の文書を送る。發起人には、濱本宗濟、岡次郎、楠本正翼の名前があつた。十月二十日完成の契約で着工し、九月十二日には上棟式が行われている。

「守待室記」後半の「道は書に因りて伝わり、学は人に因りて興こる。安くんぞ知らん、百歳の後、之を読みて奮然として起ち、以て道学の伝に任ずる者有らざらんことを」というところに、長年にわたつて蓄えた書物と共に学問を後学に託そうという碩水の熱い思いを読み取ることができよう。「因りて守先待後の語に取りて、名づけて守待室

と曰う」と述べているのは、『孟子』滕文公下篇に「守先王之道以待後之學者」（先王の道を守り、以て後の學者を待つ）とあるによつてゐる。「古昔の優れた王者（聖人）の教えをよく守つて、後世の學ぶ者たちにそれを伝えていく」という意味である。書物の蒐集・保存と伝承は、道（真理）を守り伝えていくためのものであるという考え方が、この「守待室」という名には込められていたのである。楠本正繼氏は、この語に託した碩水の思いを誰よりも切実に受けとめたに違いない。『中庸』の「孝なる者は善く人の志を継ぎ、善く人の事を述ぶ」に取つて、「正繼」という名、「伯善」という字を命名したのは、他ならぬ碩水であつた。

さて、もう一度「碩水文庫に就て」の文章に戻つてみよう。前半には、碩水の略伝と人柄、學問が記されていたが、実はこの文章には基つくところがあつた。

二 「碩水文庫に就て」と「楠本碩水先生事略」

先に「守待室」構築の経緯について触れたが、發起人のうち、中心的役割を果たしたのは碩水の甥、海山（正翼）であつた。十歳で父・端山を亡くした海山は、叔父碩水の庇護と薰陶を受け、長じてはその手足となつて崎門の伝承に尽くした。守待室建立から遡ること九年、明治三五年（一九〇二）は碩水満七十の年に当たつた。四月六日に佐世保萬松楼において祝宴が催され、さらに、在郷の門人が中心となつて各方面に呼びかけ古稀記念の論集刊行が計画される。寄せられた表祝の詩文は門人の岡田康治が編纂者となつて、十月二三日に熊本で『碩水先生 古稀引翼集』（九十八頁）として出版される。海山は「叔父碩水先生七十壽序」という漢文を書いた上に、巻頭には記念集刊行の経緯について記している。さらに、巻末には、「楠本碩水先生事略」という二一五八字の文章（漢文）が収載されており、記名はないが、海山が著したもので、碩水最初の伝記となる。碩水没後に若干手を加えられ、没後二年目の大正七年（一九一八）一月二三日に岡直養・安節兄弟によつて漢口で出版された『碩水先生遺書』十二巻の巻頭に「伝」（一九〇字）として掲げられている。また、同文は、昭和七年（一九三二）九月に岡直養が校補・出版した『朱王合編』

〔楠本碩水原輯〕の「附録」に、碩水の著した「月田蒙齋先生伝」、「端山先生楠本伯子墓碑」等と共に「碩水先生伝」として収録されたほか、昭和一〇年（一九三五）七月に同じく岡直養が出版した『碩水先生日記』の巻首にも「碩水先生伝」として収められることになる。⁹⁾「碩水文庫に就て」の前半は、海山の著した「楠本碩水先生事略」を概ね忠実に書き下し文に改めたものである。¹⁰⁾とは言え、全体としては省略したり簡略化した部分がある。例えば次のような箇所である。

「碩水文庫に就て」（以下しばらく「就て」と略す）では、「明治戊辰藩議によりて貢士を受け五月京師に上る。」とあるが、「楠本碩水先生事略」（同じく「事略」と略す）ではこの間の事情をやや詳しく記している。書き下し文で示す。明治戊辰は明治元年（一八六八）である。

明治戊辰、朝廷、列藩をして国論を代すべき者を挙げしむ。名づけて貢士と曰う。藩、先生を以て焉こゝに充てんことを議す。先生、疾と称し力とめて辞す。時に藩主、京師に在り懇切に起たんことを促し、諸有司又屢々しばしば来りて勸説す。先生已むを得ずして出でて物頭班に進み、百石を加禄せらる。五月京師に上る。

藩主心月公（松浦詮）の期待の程と同時に、碩水の出処に対する毅然たる姿勢が分かる文章である。それは、その後の事項にも見られる。「就て」の「庚午秋大学廃せらるゝと共に平戸に帰り針尾山の中に入り茅を結びて居る。」の個所である。明治三年（一八七〇）に大学が廃せられた時のことである。「事略」には次のようにある。

庚午秋、大学廃せられて、先生平戸に帰る。更に家禄若干を賜るも、先生顧みず、直ちに針尾山の中に入り、茅を結びて焉に居る。先生既に其の跡を晦くして、復た塾を開きて徒に授くるの志無し。

碩水の出処に対する考え方は常に潔い。また、「就て」では碩水が交流した諸儒の名前が列挙されているが、「事略」では特に「源（小笠原）敬齋と契合すること最も深し」として、小笠原敬齋（名は棟敬、一八二八〜一八六三）との交遊の深さを示し、「吾、天下の士と交わること少なからざるも、一見して知己を以て相い許す者は敬齋一人のみ」という碩水の言葉を引用している。更に、「事略」では碩水の尊王観が次のように記されている。¹¹⁾

先生、武門の専横、王室の不振を憤慨し、毎に「異姓を冒さざるは孝の第一義、武門に仕えざるは忠の第一義」

と曰い、今上登極し天下一新するに迨^{おぼ}んで、乃ち「我が願ひ畢れり」と曰う。

「就て」の伝記部分の最後に見える「其学博くして雑ならず」以下の文章は、ほぼ「事略」のままである。そのうち、「大学は是れ性学の書」以下、「語孟六經治めずして明かなるべし」までは、「事略」に引用するところであるが、もとは『碩水先生余稿附録二』に見える文章である。ただ、「事略」ではそれに続けて、「蓋し窮理存心の至り、心と理と会すれば、仁、庶幾かるべきのみ」という文章が引かれている。これは『碩水先生遺書』卷十随得録三に記録されている次の文章によるものである。

仁者心之元徳、而統義礼智者也。理与心会、則仁庶幾平、而其工夫、惟在窮理与存心而已。蓋理与心会、則日月至。会而為一、則不違仁。及其熟焉、則渾然無間斷矣。

また「事略」では、これらの語に続けて、「其の学、山崎氏^よ自り入り、更に進みて得る所の者有るか」と述べている。碩水の学問は山崎闇斎（崎門）から始まったが、その上に独自に体得するところがあった、という意味である。これは非常に短いが、常に傍らにいてその学問のすべてを熟知した海山が發した碩水評の結論と言えよう。そして、「事略」の末尾は、次のような言葉で結ばれている。

嗚呼、端山先生已に没するも、先生は巍然として独り存す。今、先生の為に賀するは即ち道の為に賀するなれば、乃ち之を賀するの已むべからざる所以なり。

以上のように見ると、「碩水文庫に就て」において省略された文章に、海山の碩水に対する評価が、直截に語られている部分が多いと言うことができる。楠本正継教授はこれらの文章を取り上げなかったが、海山の碩水評をほぼそのままの形で書き下し文に直したのは、「先生、平生最も自立を重じ、苟も世と合せず、而して其忠孝を励し、名分を謹み、出処を審にし、義利を弁ずるに至つては、則ち凜凜^{りんりん}乎として犯すべからざるなり」（「事略」）という一文である。世に阿らぬ自立の精神を保ち、忠孝・名分・出処を重んじ、義利を正す生き方を貫いた生涯であったこと。この文を欠けば、海山の「事略」（「伝」）は成り立たなくなる。「碩水文庫に就て」が他の文を省いてもこの一文を採つた理由であろう。

以上のように、楠本正継教授が著した「碩水文庫に就て」は、亡父海山の手になる「事略」と旧蔵者碩水自身の「守待室記」とを下敷きとするものであった。この文章には筆者名はなく、末尾に「昭和九年九月」とのみ記されている。碩水没後十八年、海山没後十三年に当たるとする。

三 「碩水文庫」の貴重書

『碩水文庫目録』の凡例には、「書名の頭に*印を附せるは貴重書なり。」とあり、同目録には、計三十六部に*印が附されている。以下、目録掲載順に掲げる。

遠古土點 慶応三年 写(楠本碩水) 一冊

加藤棕廬詩文 其他 写(楠本碩水等) 一冊

冠昏儀略 村土宗章(玉水)撰 写(楠本碩水) 一冊

鬼神來格説口義(祭祀來格説口義) 北澤就将(遜齋)述 写(楠本碩水) 一冊

敬齋箴筆記 附弘毅章口義 三宅重固(尚齋)述 写(楠本碩水) 一冊

五経瑠嬛 (中村楊齋旧蔵) 三四冊

克己章三功夫弁 其他 写(楠本碩水) 一冊

祭礼考(喪礼私略合綴) 西川直純 一冊

雑鈔 三宅重固(尚齋)述 写(楠本碩水) 一冊

氏族弁証附録 附同姓為後称呼説 写(楠本碩水) 一冊

時文摘紙 村田春海撰 明治二年 写(楠本碩水) 一冊

謝林合鈔 謝翱撰 明治一九 写(楠本碩水) 一冊

初学課業次第 林衡(述齋)述 佐藤坦(一齋)筆記 写(楠本碩水) 一冊

- 諸家文詩抄 自筆(楠本碩水) 二冊
- 西銘講義 淺見安正(綱齋)述 写(楠本碩水) 一冊
- 釈菜儀節 附考議 中村之欽撰 写(楠本碩水) 一冊
- 〔碩水〕再読雜纂 写(楠本碩水) 二冊
- 碩水雜纂 第一 写(楠本碩水) 二冊
- 接鮮瘡語 松崎復(慊堂)編 写(楠本碩水) 一冊
- 曹月川先生集 曹端著 張伯行訂 安政七年 写(楠本碩水) 一冊
- 喪礼私略(祭礼考合綴) 西川直純撰 写(明治四十二年刊 喪礼私略ノ底本) 一冊
- 大学古本旁釈 王守仁撰 佐藤坦(一齋)補 写(楠本碩水) 一冊
- 大学或問筆記 三宅重固(尚齋)述 写(楠本碩水) 一冊
- 智藏説 三宅重固(尚齋)編 写(楠本碩水) 一冊
- 中庸輯略或問筆記 三宅重固(尚齋)述 写(楠本碩水) 一冊
- 趙東山伝 其他 写(楠本碩水) 一冊
- 伝習録欄外書 佐藤坦(一齋)撰 写(楠本碩水) 三冊
- 天柱録 饒田諭義撰 写(楠本碩水) 一冊
- 陶菴先生詩鈔 写(楠本碩水) 一冊
- 白鹿洞書院揭示講義 村土宗章(玉水)述 南條元常記 写(楠本碩水) 一冊
- 本朝度量權衡攷 狩谷望之(掖齋)撰 写(楠本碩水) 五冊
- 文字彙 金天基訂 写(楠本碩水) 一冊
- 栗水問答 並木正韶(栗水)問 楠本碩水答 写 一冊
- 論宇井弘篤愛之理説 高階有則述 写(楠本碩水) 一冊

論語私説抄略 写(楠本碩水) 一冊

和靖尹先生文集 一〇卷 写(楠本碩水) 一冊

『碩水文庫目録』における「貴重書」の選択基準は、主として旧蔵者である楠本碩水の自筆写本と自著であり、十三部(四十二冊)ある。それ以外のものとしては、中村惕斎旧蔵の『五経瑯嬛』(三十四冊)、西川直純『喪礼私略(祭礼考入台綴)』の自写本(二冊)であり、併せると三十六部(七十七冊)である。中村惕斎旧蔵としては、他に『詩経疑問』、『春秋疑問』、『書経疑問』、『礼記疑問』がある。その他の旧蔵書としては、朝川善庵(名は鼎、一七八一〜一八四九)旧蔵の『古周易』、『四書弁疑』、『砭蔡編』、尼崎修斎(本名は秋田孝徳、?〜一八七三)旧蔵の『小学口義』、『大学章句筆記』、『中庸章句筆記』、『孟子筆記』、『論語筆記』がある。以上はいずれも九州大学附属図書館の貴重書庫に収蔵されているが、これ以外にも「碩水文庫」本で貴重書庫に収められている書籍がある。明刊本や江戸初期刊本など、刊行年次の古いものを中心である。主なものをそれぞれ刊年順に次に掲げる。

名臣言行録(前、続、別、外、新集) (宋) 朱熹・李幼武撰 正徳二三(一五二八)刊 一四冊

新刊性理大全 七〇卷 (明) 胡広等奉勅撰 嘉靖三二年(一五五三)刊 二〇冊

周礼全経 一三卷 (明) 柯尚遷撰 隆慶二年(一五六八)刊 六冊

家礼通行 八卷 (明) 羅萬化撰 万曆元年(一五七三)刊 六冊

金華正学編 一〇卷 (明) 趙鶴撰 万曆七年(一五七九)刊 二冊

龜山先生集 四二卷首一卷 (宋) 楊時撰 万曆一九年(一五九一)刊 一〇冊

詩経疑問 八卷 (明) 姚舜牧撰 万曆三三年(一五九五)刊 六冊

春秋輯伝 一三卷 宗旨一卷凡例二卷 (宋) 胡安国 万曆三三年(一五九五)刊 一二冊

重刻中閣老校正朱文公家礼正衡 八卷 (明) 彭濱校補 万曆三七年(一五九九)刊 四冊

礼記疑問 一二卷 (明) 姚舜牧撰 万曆三七年(一五九九)刊 六冊

礼記疏意參新 二三卷 (明) 陳郊纂輯 万曆三八年(一六〇〇)刊 六冊

書經疑問 一二卷 (明) 姚舜牧撰 万曆三二年(一六〇四)刊 六冊

方正学先生遜志齋集 二四卷 (明) 方孝孺撰 万曆四〇年(一六一二)刊 一二冊

宋大慧普覺禪師書問 (宋) 釈宗杲撰 万曆四五年(一六一七)序刊 一冊

高子遺書 一二卷 (明) 高攀龍撰 崇禎四年(一六三一)刊 八冊

麟經新旨 三〇卷 (明) 劉侗撰 崇禎八年(一六三五)序刊 六冊

經典釈文 三〇卷 (唐) 陸德明撰 崇禎一四年(一六四二)刊 一二冊

祥刑要覽 (明) 吳訥撰 寛永元年(一六二四)刊 一冊

天地万物造化論 (宋) 王栢撰 寛永一九年(一六四二)刊 一冊

小学集説 六卷 (明) 程愈撰 寛永二〇年(一六四三)刊 六冊

このほかに、「碩水文庫」に關連があつて貴重書庫に保管されているものとして、次のような書籍の版本がある。

碩水先生遺書 十二卷 岡直養・岡安節編

守待室藏版仿宋湖北陶懋樹刊 大正七年漢口

版木 合計 二百五十九枚(完)

蒙齋先生詩集 一卷拾遺一卷 月田強撰 楠本宇嘉輯

鳳鳴書院藏版 大正七年漢口

版木 合計 四十枚(完)

蒙齋先生隨筆 二卷 月田強撰

鳳鳴書院藏版 大正七年漢口

版木 合計 三十八枚(完)

これらの刊本は、いずれも「碩水文庫」に収蔵されているが、文庫成立当初のものではなく、昭和九年(一九三四)二月二七日付けで、「岡次郎寄贈」として登録されている。この三種の版本は、すべて大正七年(一九一八)に碩

水門人の岡直養（字は次郎、号は彪邨、一八六四〜一九四九）とその弟で当時漢口日報社長であった岡安節（字は幸七郎、号は西門、一八六八〜一九二七）によつて、中国湖北省漢口で出版されたものである。版木は漢口から楠本家へ送られ、楠本正継教授の手を経て九州大学附属図書館に保管されるに至つたものと推測される。このうち『蒙齋先生隨筆』は、二十三歳の碩水が生涯ただ一度だけ蒙齋に会つた時に、蒙齋が「容易に人に示したことはない」自らの隨筆を碩水に見せたものであつた（『過庭余聞』）。『碩水先生日記』には、「蒙齋隨筆を得て之を読み、甚だ感ずる所有り」と記している。一方、『蒙齋先生詩集』の方は、蒙齋が手写した詩稿三本（『偶記詩草』、『梨花小窓集』、『海氣深处詩稿』）を碩水が校訂編輯したものである（『碩水先生余稿』卷一「蒙齋先生詩集序」）。

碩水の門人である貞方弥三郎（名は研、一八六六〜一九五七）が筆録した「碩水先生言行雜記」（『碩水先生余稿附録一』）には次のように見える（原漢文）。

安政甲寅正月一二日、先生、長洲を過り月田蒙齋を訪う。時に先生、酒を携え以て往く。蒙齋、手ずから鱒魚を刺し之に供す。談話竟夕、蒙齋、其の隨筆を出だし之に示す。明治二十六年、蒙齋隨筆を印し、二十七年、蒙齋詩集を印し以て同志に頒わかつ。其の敬慕亦た以て見るべきなり。

この時の私家版に誤りが多かつたため、岡直養が校訂して出版したのが漢口版である。貞方弥三郎の言う通り、敬慕の情が結実した二書と言えよう。そして、岡兄弟苦心の跡であるその版木は、碩水旧藏書と同じ処に収められることになつたのである。次に、改めて「碩水文庫」蔵本の特徴について見てみることにする。

四 「碩水文庫」蔵本の特徴

「碩水文庫に就て」の中に、「上六経四子濂洛閩閩より下元明清及本邦理学諸儒の書に至るまで悉く其中に列す」とあり、「宋以来の程朱学、本邦崎門学関係の文献」として貴重な資料であると述べられていたように、「碩水文庫」蔵本の特色としては、先ず所謂宋明理学関連書籍、殊に中国近世儒学者の文集が挙げられる。既に貴重書として掲げた

もの以外では、『繫齋集』二四卷従祀録六卷（袁燮撰、同治一一）、『聞過齋集』四卷（呉海撰、康熙四七）、『白沙子全集』九卷 古詩教解二卷 首尾各一卷（陳猷章撰、乾隆三二六）、『惜陰軒叢書統編』（呂栢撰、李錫齡編）、『王陽明先生全集』二二卷（俞嶠重編、康熙一九、補写）、『易纂言』一〇卷（呉澄撰、写本）、『羅一峰先生文集』一四卷（写本）、『顧端文公遺書』（顧憲成撰、光緒三三）、『理学宗伝弁正』一六卷（劉延詔撰、同治一一）、『二曲集』四六卷（李容撰、光緒三三）などが、比較的珍しい書籍と言える。

次に、何と言つても「碩水文庫」の最大の特徴と言えるのは、江戸時代の儒学者による宋明理学関係の注釈書・解説書の類である。例えば朱熹の『易学啓蒙』に關してだけでも、浅見安正（綱齋）述『易学啓蒙師説』（写本）、浅見安正述・上原正福編『易学啓蒙說帶講書』（写本）、浅見安正述『易学啓蒙補要解師説』（写本）、馬場信武撰『易学啓蒙図説』（元禄一三年刊）、三宅重固（尚齋）述『易学啓蒙筆記』（写本）、若林進居（強齋）述『易学啓蒙師説』（写本）などがある。また、『大学』に關しては、それこそ枚挙に暇がないが、浅見安正述『大学伝五章講義』（写本）、三宅重固述『大学章句資講』（写本）、同『大学章句筆記』（写本）、同『大学統筆記』（写本）、若林進居述『大学経文講義』（写本）、久米順利（訂齋）口義・北澤就将（遜齋）録『大学序』（写本）、朝川鼎（善庵）述『大学原本釈義』（文政一三）などがある。以上から分かるように、これらは概ね写本である。さらに言えることは、多くが崎門学者の手になつてゐることである。碩水は月田蒙齋から直接に崎門の伝授を得るので、山崎闇齋の高弟、所謂三傑の一人である三宅尚齋（名は重固、一六六二〜一七四一）の学統に属する。崎門の儒学は著述ではなく、師からの直接の伝授を記録することを尊んだ。記録されたものは、別の者によつてさらに書写されていく。従つて、膨大な数の講義記録（「師説」、「筆記」類）が残されることになつた。崎門学の研究は、これらの写本の蒐集・読解を大前提とすると言つてもよい。碩水が崎門写本の蒐集にいかにか心血を注いだかということは、『碩水文庫目録』に目を通すだけで容易に分かる。碩水自身も崎門講義録の筆写を行ったことは、楠本正継博士が「貴重書」とした書目の中に見ることが出来る。間違ひなく、「碩水文庫」は崎門写本の宝庫の一つなのである。

さらに、「碩水文庫」の特色を挙げるならば、崎門写本に限らず、江戸時代の学者の著述を丹念に蒐集しているこ

とである。その中でも刮目すべきは、江戸初期の朱子学者である中村惕斎関連の書物をほとんど網羅的と言ってよいほど蒐集している点である。中村惕斎(名は之欽、一六二九〜一七〇二)は、京都において朱子学の講究と教授の生涯を送り、経書や宋儒の注釈書をはじめとして、膨大な量の著述を行った人物である。基本的には崎門とは異なる一家を成していたが、碩水は惕斎に対する尊敬の念を終生持ち続けたようである。碩水は惕斎に対して、「本朝の儒者、博学力行、氣習を超脱して、古人に步驟する者は、蓋し先生二人のみ」と称賛し、『碩水先生遺書』卷六「書中村惕斎手沢本後」、また惕斎が生涯仕えなかつたことについても、「中村惕斎、藩国に仕えざる、其の識高し」と評価している(『碩水先生遺書』卷八)。京都において「仲敬父印」という印記のある惕斎の手沢本を入手した碩水は、朱点や句読が一人の手になるものであることと、惕斎の『五経筆記』にそれら教書からの引用が多く見られることから、すべて惕斎の旧蔵書であろうと述べ、「其の手沢の存する所、珍して伝えざるべからざるなり」と記している(『書中村惕斎手沢本後』)。今日、「碩水文庫」貴重書として収められている。貞方弥三郎の記した『碩水先生余稿附録一』には、次のように見える(原漢文)。

崎門の諸儒の著書、極力搜索す。中村惕斎の著書、皆購収せざるなし。増田立軒の著書も亦た數種を蔵す。多く鈔本に係る。

中村惕斎の著述は出版されたものも多く、『講字筆記』三卷(寛保三年刊)、『詩經示蒙句解』一八卷(天明八年刊)、『四書示蒙句解』二八卷(元禄一四年刊)、『四書章句集註鈔說』(元禄三年刊)、『慎終疏節』(元禄三年序刊)、『追遠疏節』(享保二年刊)、『筆記周易本義』一六卷(明和元年刊)など、ほとんどの刊本が「碩水文庫」に収蔵されている。さらに、未刻のまま残された彼の文集など、次のような写本が「碩水文庫」には所蔵されており、惕斎研究のための貴重な資料となっている。

韻学私言 写本 一冊

三器通考 六卷 写本 三冊

积菜儀節 附考議 写本(楠本碩水) 一冊

太極図説解筆記 写本 一冊

惕齋先生文集 一三卷 中村孟幹等編 写本 一一冊

また、『碩水先生余稿附録一』に言及されているように、惕齋晩年の高弟であり、その遺書の編纂刊行に尽力した徳島藩儒増田立軒（名は謙之、字は益夫、一六七三〜一七四三）の次のような著述が収蔵されている。¹¹⁾

仲子語録 六卷 益田立軒述 寛延二年校 写本 一冊

中庸考 益田立軒述 写本 一冊

中庸章句聞録 益田立軒編 元文五年原写 写本 一冊

惕齋先生行状 増田益夫編 延享三年 大阪刊 一冊

入学紀綱聞録 益田立軒述 寛保三年 服部慎徳録 写本 一冊

入学紀綱句解 増田謙之著 享保一三年 京都刊 一冊

孟子考 益田立軒講 写本 二冊

論語考 益田立軒講 寛政六年校 写本 五冊

特に『仲子語録』六卷は、立軒が師惕齋の言行を記録した貴重な書物で、写本のみわずかに伝わる。碩水は、「仲子語録（門人増田立軒の編する所）、惕齋臨終の事を記すこと詳らかなり。学ぶ者は読まざるべからず」と語っているが（『碩水先生遺書』卷一二）、その臨終前後の様子が詳細に記録されている卷六の部分は、内閣文庫所蔵写本など他本には欠落しており、「碩水文庫」蔵の写本のみが唯一の資料ということになる。

「碩水文庫」の特色として今一つ挙げるならば、崎門写本の一部と言うこともできるが、神道関係書の写本が数多く蒐められていることである。山崎闇齋は晩年に垂加神道を提唱するに至るが、彼が著した『神代卷風葉集』九巻と『中臣祓風水草』六巻は、神道派の門人たちによって経典とされる。「碩水文庫」には両者の写本が収められているが、その他に次のような写本類が見られる。

中臣祓講説 西依周行（成斎）述 写本 一冊

中臣祓師説 若林進居(強齋)述 享保一五年 写本(澤田重淵) 一冊

神代卷日蔭草口訣 五卷 岡田正利編 写本 二冊

垂加流神代卷或問 春原信直撰 写本 一冊

神道葬祭家礼 跡部良顕撰 文政四年 写本 一冊

神道大意 若林進居(強齋)述 文化一一年 写本 一冊

神拝次第鈔 附幣制法 玉木正英口授 岡田正利録 写本 一冊

玉籤集 玉木正英撰 写本 八冊

元根録 玉木正英撰 写本 三冊

御鎮座次第記秘伝 玉木正英述 文政四年 写本 四冊

橘家臺目口伝秘 玉木正英述 写本 四冊

橘家鳴弦卷極秘 写本 一冊

貞方弥三郎は碩水の蔵書について、次のように記している(『碩水先生余稿附録一』)。

垂加派神道の諸書、亦た多く之を蔵す。其の間、極秘と称する者少なからず。皆、鈔本に係る。

崎門三傑の一人浅見綱斎の門人であつた玉木正英(号は葦斎、一六七二〜一七三九)は、神道をおおきまらちんちろ正親町公道・春原

民部より受け、五鱗靈社と号し、「垂加神道は、先生に至つて蓋し大いに備われり」(『正学小伝』)と言われる人物である。『玉籤集』、『元根録』など多くの著述があり、「碩水文庫」にもその鈔本を収める。碩水が後に増補した『日本

道学淵源統録』(卷三)の玉木正英の項には、校補者である千手興成(号は旭山、一七八九〜一八五九)の「君子の道は秘事有る無し。…(中略)…既に焉を筆して還つて其の書を焚き以て之を秘す。此れ何等の陋見、其の道を知ら

ざるを見ること多し」という批判的な言葉が記されている。碩水は神道流の「秘伝」を好んだわけでは決していないが、垂加神道の諸書にも充分な目配りをしてしていたことがその蔵書内容からも分かる。その意味でも、「碩水文庫」は崎門

研究の宝庫と言えるのである。

五 図書館蔵書の疎開と武内文庫の設立

さて、『碩水文庫目録』が刊行されてから十年後、昭和一九年（一九四四）五月一日、楠本正継教授は九州大学附属図書館の第十一代図書館長に任命される。折から大東亜戦争（太平洋戦争）が激化、図書館所蔵貴重圖書の疎開が最大の課題であった。¹⁵六月二十七日（火）午前開催の第二十七回附属図書館商議委員会で学外疎開が決定し、準備に入る。疎開先の調査が行われ、佐賀県小城郡多^{たく}久村、及び佐賀県杵島郡大^{おお}町町に図書疎開が実施された。翌昭和二〇年（一九四五）三月十二日（月）午後開催の第二十八回附属図書館商議委員会で第二次学外疎開が決定する。『九州大学五十年史 学術史 下巻』（八二二頁）には次のように記されている。

この第2次疎開先は、粕屋郡宇美町武内町長のあつ旋によつて、山間部の民家の土蔵2か所に疎開が決定した。トラックは使用不可能のため、宇美町馬車組合の協力によつて2日間にわたつて約1万冊の圖書を疎開することができた。

このようにして疎開された図書は、終戦後半年を待たずに一冊の事故もなく回収された、とある。戦争末期に図書館長という大役を引き受け、図書疎開という難問題に身を挺した楠本正継教授は、昭和二一年（一九四六）六月四日付けで館長を辞任する。

ところで、先に引いた『五十年史』に「粕屋郡宇美町武内町長のあつ旋によつて」とあつたが、この町長の名前は武内謙介と言ひ、実は楠本碩水の門人であつた。碩水が明治三〇年（一八九七）に作り、自撰の『碩水余草』（明治三六年刊）に収録した「送武内謙介帰筑前」という詩に、次のように見える（『碩水余草』、『碩水先生遺書』巻三）。

莊子去武子来

莊子去りて武子来る

武子淳実能勤学

武子は淳実 能く学に勤む

莊子強毅且有才

莊子は強毅 且つ才有り

二子従遊為日久

二子従遊して 日久を為す

今朝送君心転哀

今朝君を送りて 心転た哀し

針峽潮急孤舟遠

針峽潮急にして 孤舟遠し

瞻望不及徘徊

瞻望するも及ばず 独り徘徊す

再来幸待他年約

再来幸待す 他年の約

老夫雖哀志未灰

老夫哀しむと雖も 志未だ灰ほろびず

莊子即本莊直記肥後人

莊子は即ち本莊直記、肥後の人なり

鳳鳴書院で久しく学んだ門人武内謙介をその姿が見えなくなるまで見送り、再会を待ち望む碩水の情感あふれる詩である。この後、武内謙介は郷里である福岡県粕屋郡宇美町に帰り、昭和一〇年（一九三五）九月から同二二年（一九四七）二月まで、福岡県の県会議員を務める。その間、昭和二二年（一九三七）七月三〇日から同二二年（一九四六）一月三一日まで、第九代の宇美町長となっている（在職期間八年六ヶ月）。当然のことながら、師門との関係で楠本正継氏と親交があったと考えられる。楠本館長が九州大学附属図書館の貴重な書籍を戦禍から護ろうとした時、その疎開事業に協力を惜しまなかったのである。

それから、さらに十年の後、武内謙介氏の旧蔵書は、武内継治氏によって九州大学に一括寄贈されることになる。昭和三〇年九月五日（一九五五）に受人登録され、「武内文庫」という呼称で、文学部書庫の中に混配される。⁽¹⁸⁾一五四部、五八八冊、宋明儒学関係の書物、及び江戸儒学、殊に崎門学派の書物が大半である。和刻本が多いが、崎門写本も含まれている。この中には、一連の中国思想関連書籍とはまったく縁のないものが含まれている。次のようなものである。

『宇美町制要覧』（昭和二五年版） 一冊

『福岡県通常県会決議録』（昭和九年至一一年、一六年至二〇年） 八冊

『福岡県通常県会決議録』（昭和一〇年至一三年、一五年、一七年至二〇年） 九冊

中でも、詳細な『会議録』には、何力所も文言の訂正や補筆と思われるペンの跡が見られる。すべて県会議員「武

内謙介」発言（質問）の個所である。

針尾の楠本家に長い間保存されていた多くの書簡は、現在九州大学に保管されているが、その中に武内謙介から楠本碩水宛てた二通の書簡を見出すことができる。晩年の「碩水先生」の体調を気遣う便りである。¹⁷

武内謙介氏は楠本碩水の門人として崎門学を学び、宋明儒学並びに崎門関係の多くの書物を蒐集した。やがて、おそらくその死後、旧蔵書は恩師碩水の蔵書も収められている九州大学に寄贈されることになったのであろう。この年には、楠本教授が代表者となり、文部省科学研究費助成金による総合研究「九州儒学思想の研究」が開始されている。また翌昭和三年（一九五六）から、アメリカのロックフェラー財団研究助成費を受けた「宋明思想の研究」が始まり、崎門学関係のコレクション「坐春風文庫」の設立（昭和三年）へとつながっていく。こうした時宜にもかかわり、九州に根ざした宋明学・崎門学の貴重文献として五八八冊の書物は図書館に受け入れられたのである。

二つの大きな研究プロジェクトを完成させた楠本正継教授は、昭和三年（一九六〇）三月に九州大学を定年退官する。二年後に生涯の研究をまとめて、『宋明時代儒学思想の研究』（廣池学園出版部）として出版した楠本正継氏は、昭和三八年（一九六三）一月二三日に福岡市の自宅で逝去する。奇しくも大叔父碩水の命日であった。

おわりに

「碩水文庫」は、朱子学の講究と崎門の顕彰に生涯を捧げた楠本碩水、そして碩水を扶けてその蔵書保持のために「守待室」を建ててべく努力した楠本海山、さらにその旧蔵書の散佚を防ごうと尽力した楠本正継氏、これら三代の人々の手によってなったものである。楠本正継氏は「碩水文庫に就て」の中で、「然れども先生歿後は其蔵書次第に散出せるものあり、例へば明嘉靖本三礼鄭注後」、『碩水先生遺書』巻六）によって分かる。京都の書肆で購入した該書に碩水自身が著した「書明嘉靖本三礼鄭注後」、『碩水先生遺書』巻六）によって分かる。京都の書肆で購入した該書について精密に校讐した上で、それが嘉靖本であることを確信した碩水は、「此の本は実に予が家の收儲中の一珍書な

り。子孫為る者、宜しく什襲して之を秘すべし」と書き残している。この文の冒頭において、碩水は次のように述べている。

蔵書の難きことは、收儲の多不多に在らず、甄揆の精不精に在り。夫れ四部の録、世に行わるる者、汗牛充棟、枚挙に暇あらず。今、一囊金を操りて都市に入れば、千万卷、立ちどころに致すべきなり。何ぞ多からざるを之れ患えん。但だ其の精なる者に至りては、則ち甚だ少なくして覲易からざるのみ。

大切なことは蒐集する書物の数ではなく、いかにして善い本を入手するかということである、と。学問と蒐集の目的を自ら明確に定めた碩水が生涯をかけた成果こそ、「碩水文庫」に結実していると言える。約百年前に碩水が記した「守待室記」の一節を、最後にもう一度引用しよう。

道は書に因りて伝わり、学は人に因りて興る。安くんぞ知らん、百歳の後、之を読みて奮然として起ち、以て道学の伝に任ずる者有らざらんことを。

[注]

(1) 楠本正継氏に関しては、拙稿「楠本正継博士の宋明儒学思想研究」、『臺灣東亜文明研究學刊』第2巻第2期、二〇〇五年)、「楠本博士覚書」(『名古屋大学中国哲学論集』第六号、名古屋大学中国哲学研究会、二〇〇七年)を参照。なお、同氏に関する参考文献については、拙稿前者を参照。

(2) また、昭和五五年(一九八〇)三月に中央図書館で行われた貴重図書展示の際して、荒木見悟氏が「中国近世思想関係貴重漢籍(展覧第3回)」(『図書館情報』一一七号、一九八〇年三月)の中で言及しており、さらに「第三回中央図書館貴重文物展覧目録」(『大学広報』三七〇号、一九八〇年三月)所収「展覧資料の解説」の中で、「楠本碩水略伝」を記し、「碩水文庫」所収の『碩水遺書』、『伝習録欄外書』を取り上げて解説している(この「解説」には著者名はないが、中央図書館の「はしがき」に、「展示漢籍や版木の配列・解説等につき文学部荒木見悟教授にひとかたならぬ御尽力と御指導を頂きました」と見える)。

(3) 楠本端山・碩水の編著書は、岡田武彦等編『楠本端山碩水全集』(葦書房、一九八〇)としてまとめられている。

(4) 楠本正翼については、拙稿「楠本海山覚書―ある崎門学者の生涯と著述―」、『香椎鴻』第四十九号、福岡女子大学、二〇〇三)を参照。

(5) 九州帝国大学附属図書館時代の蔵書目録としては、『九州帝国大学図書目録』(昭和四年末現在) 第一卷(一九三二年一月刊)、第二卷(一九三三年五月刊)、『同・補遺増加篇』(昭和八年三月末日迄増加和漢図書、一九三五年二月刊)、『同・和漢図書増加篇第二』(昭和八年四月〜同一年二月、一九三八年三月刊)、『同・和漢図書増加篇第三』(昭和十一年一月〜同一年二月、一九四一年一月刊)が作られているが、「碩水文庫」蔵本は、これらには収載されていない。後に編纂・刊行された『九州大学附属図書館漢籍目録上・下』(九州大学附属図書館、一九九五年刊)には、漢籍・準漢籍のみ収載されている。今日では、インターネットによる「九州大学附属図書館蔵書検索システム(OPAC)」で「碩水文庫」蔵本の検索が可能である。なお、『碩水文庫目録』以前に作られた文庫蔵書目録としては、『萩野文庫目録』(九州帝国大学附属図書館編、謄写印刷、一九三二年一月)があるが、和書が中心である。

(6) この間の事情については、藤村禪著『楠本碩水伝』(芸文堂、一九七八)三二四〜三一七頁を参照。

(7) 『鳶魚齋詩文』所収「長兄名字号説」。拙稿『鳶魚齋詩文』―明治の儒学者楠本海山の詩稿と文稿―(『九州中国学会報』第三十三卷、一九九五)を参照。

(8) 「事略」の末尾一四二字が削除され、代わりに「伝」には六十五字が新たに追加されている。これは、古稀頌寿に至った事情などの説明の代わりに、碩水の生卒年月日、墓所、妻子のことなどが記されたもので、最後に「従子正翼謹撰」と書かれている。その他、文字に異同が見られるが、おそらく『碩水先生遺書』の出版に当たり、岡直養の校閲を経て海山が修訂したものと見られる。

(9) 『碩水先生遺書』、『朱王合編』は、共に影印版として『楠本端山碩水全集』に収められている。この両書所収の文章は、全く同一であるが、『碩水先生日記』所収のものは、二箇所わずかに表記が異なり、文末に、「先生所著、有遺書十二卷、余稿三卷、所輯有日本道学淵源録十一卷、朱王合編四卷、皆已公于世、門人岡直養謹記」と附加されている。

- (10) 「事略」と「伝」の文章が異なる部分では、概ね「事略」によっており、一部「伝」の文を参照しているようである。
- (11) 碩水の語を息子の正脩が記録した『過庭余聞』には、「尊王説ト崎門学トハ、予ガ平戸デハ始メタモノゾ」、「予ガ尊王説モ名分カラゾ。幕府大名ヲ嫌フモ名分カラゾ」とある。
- (12) 同じ時に、西田龍太著『鳴溪先生詩集』（大正七年八月刊）一冊や、岡直養が出版した『黙識録』（昭和八年一月刊）二冊、『日本道学淵源録』二冊、『同統録』四冊、『同増補』二冊、『学思録鈔』（晩年謄録合綴）二冊などが「岡次郎寄贈」となっている。当然、これらの書物は『碩水文庫目録』には収載されていない。また、昭和一〇年七月二五日付けで、岡直養出版の『碩水先生日記』（昭和一〇年七月五日刊）が登録されている。つまり、「碩水文庫」は昭和八年に受入登録され、翌年に『目録』が刊行されたのち、岡直養の寄贈書が追加登録されたものと言いうことができる。
- (13) 中村惕斎については、『中村惕斎・室鳩巢』（叢書・日本の思想家）、明徳出版社、一九八三）所収の拙著「中村惕斎」を参照。
- (14) 増田立軒の『仲子語録』については、前掲拙著及び竹治貞夫著『近世阿波漢学史の研究』（風間書房、一九八九）を参照。
- (15) 以下は、『九州大学五十年史 学術史 下巻』第14編 附属図書館、第5節 楠本館長時代（九州大学創立五十周年記念会発行、一九六七）を参照。
- (16) 「武内文庫」については、拙稿「文学部所蔵「武内文庫」の謎を追って―楠本正継図書館長とその時代―」（『図書館情報』通巻二一〇号、九州大学附属図書館、二〇〇五年三月）を参照。
- (17) 碩水が生前「不許示人」と自署した日記（昭和十年に岡直養により『碩水先生日記』として出版）の明治四十年（一九〇七、碩水七十六歳）の条には、「九月朔日（新十月七日）武内謙介来訪。四宿而去。」と記されている。

〔附記〕「碩水文庫」の調査に当たって、九州大学附属図書館職員の方々に大変お世話になった。記して感謝を申し上げたい。本稿を「碩水文庫」の創設者で、九州大学第十一代附属図書館長であった故・楠本正継先生の霊に捧げる。